

# 子どもが主体的に学びに取り組むための教師の指導言について

大和田 夏希  
教育方法開発コース

## 1 テーマ設定の理由

### (1) 現在の状況より

近年、これまでの常識では考えられないような予測困難な時代となっている。このような時代において子どもが「生きる力」を身につけるために、文部科学省は『主体的な学び』、『対話的な学び』、『深い学び』の視点は、各教科等における優れた授業改善等の取組に共通し、かつ普遍的な要素である。<sup>1)</sup>と述べている。つまり「主体的・対話的で深い学び」の視点をもとに授業改善を推進することを求めている。具体的に中央教育審議会答申では、「学ぶことに興味や関心をもつこと」が主体的な学びの前提となっている。

しかし単に子どもに学びを委ねるだけでは主体的な学びは成立しない。石井英真は「授業の過程は、現象として見る限りは、教師と子ども、子どもと子どもの間のコミュニケーションの過程です。そして、この過程をリードしたり組織したりする上で重要な役割を担っているのが、教師の言葉（話し言葉）です」<sup>2)</sup>と述べている。さらに大西忠治が『授業において教師の子どもに向かって発する言葉』を、『指導言』<sup>3)</sup>と定義していることから、教師の指導言を工夫することで子どもの主体的な学びを促進できると考え、本研究を実施することとした。

## 2 基本的な考え方

### (1) 教師の指導言について

教師の「指導言」は、大西によって「説明」「指示」「発問」の3つに分類される。

「指示」は、指し示すということである。

「発問」は、問いを発するということである。

「説明」とは、説き、明かすということである。

この三つの「指導言」が、相互にどう関係し、相互にどのような本質的なちがひがあるかを知っておくことは、「指導言」を毎日使用して教育活動をする私たち（つまり教師）にとっては、きわめて重要なことである。<sup>4)</sup>

つまり毎日の授業において、教師が発する言葉を構成している3つの指導言、「説明」「指示」「発問」の性質や使い分け方を理解しておくことが、授業改善の上で重要である。大西は、「説明」「指示」「発問」をまとめた上で、教育技術の磨き方についても述べた。

こう考えると、「指導言」は、「説明」「発問」「指示」のそれぞれの性格をよく知って、教材分析と、生徒の状況と、自分の教育的力量（技術）に応じて、的確にそれを選び、それを一時間の授業の構成として、使いこなしていくことが、いかに重要かがおわかりいただけるだろうと思う<sup>5)</sup>。

それぞれの指導言の特徴を理解した上で、教材や子どもの実態、更には授業の場面に応じて、教師がどの指導言を使うべきかを判断する必要がある。よって本研究では、指導言の特徴を踏まえ、筆者自身の教育技術に合わせた指導言の改善を行い、どのような課題や改善点に繋がるかを調べていく。

### 3 実践の概要

#### (1) 主題に迫るための手立て

本研究では、小学校4年生の算数科「角とその大きさ」を対象に、以下の工夫を実施した。

##### ① 説明

教師が一方的に説明する時間を減らすために、児童とのやり取りを増やした。具体的には、授業の振り返りや児童の発言をもとに授業の課題を設定したり、児童の発言や記述からまとめを作成したりした。

##### ② 指示

授業中の指示が一部の児童に伝わっていない場面があったため、以下の3点を工夫した。

話し始める前の間：児童が話を聞く体勢を整えているかを確認。

話しているときの目線：児童一人ひとりに目を配ることで集中を促す。

話し終わった後の確認：指示が伝わったかを個別に確認。

##### ③ 発問

発問を工夫し、児童の考えを深めるための問いかけを行った。例えば、教師が意図的に間違いを示し、児童が思考する場面を設けることで、クラス全体での議論を促進した。

### 4 実践の考察

各指導言の工夫が授業にどのように影響を与えたかを考察する。

#### (1) 説明

教師の一方的な説明を減らすために、第6時では、「①前時までの授業の振り返り」「②導入での前時の想起」を試みることで、児童から「角をかく」という本時の活動を引き出した。また第7時では、教師が一方的に決めたまとめではなく、児童の言葉でまとめをかくために「③自由記述のまとめ」に挑戦した。

##### ① 前時までの授業の振り返り

前時までの授業の振り返りで、「測った角をかいてみたい」と書いた児童がいた。そのため第6時の課題を考える前に、これまでに書いたノートを見返して「角をかいてみたい」と発言する児童が出るのが予想できた。

##### ② 導入での前時の想起

導入では、前時に学んだことを問いかけた。そして様々な角の測り方を学習してきたことを想起

させた上で、次にやってみたいことを考えるように促した。これまでに学習した角について測る以外の活動を想像することで、児童から「角をかく」という活動を引き出すことができた。

### ③ 自由記述のまとめ

第7時のまとめでは「三角形をかくときには、( )に気を付ける。」の( )の中に当てはまる言葉を、児童毎に考えて自由記述で書いてもらった。そして数名の児童に書いたまとめを発表してもらい、その意見を箇条書きで板書した。三角形をかくという活動には様々な注意事項がある。よって児童一人一人が気付いたことや意識したいところが異なったため、まとめの内容も多様となった。だからこそ、共有された他の児童のまとめを書き写す児童や、同じ内容のまとめに頷く児童など、より一層互いのまとめの発表を熱心に聞く児童が多かった。

### (2) 指示

指示が聞こえづらいという課題をもった児童がいるため、「①話し始める前の間」「②話しているときの目線」「③話終わったあとの確認」の3点の手立てを実践して、指示が児童全体に伝わるようにした。

#### ① 話し始める前の間

指示を出すために教師が話し始める前、話を聞く姿勢がとれているのかを確認するように心掛けた。児童が活動を続けたまま指示を出してしまうと、聞くことに集中できていないため、聞こうとしていても指示が聞き取れなくなってしまうやすい。だからこそ、児童が落ち着いて話を聞く姿勢をとるまで待ってから、次の指示を出す必要がある。

#### ② 話しているときの視線

児童が話を聞き続けるための工夫が必要となる。そこで児童一人一人と目線を合わせるように心掛けた。目線が合うことによって、全体ではなく児童一人一人に話しているような緊張感が生まれる。また教師以外の方を向いている児童に対しては、その児童の名前を出して簡単な問いかけを行うことで、話を聞く必要性を生じさせた。

#### ③ 話し終わったあとの確認

指示を出した後に活動へ移った際、最初の机間指導で全ての児童が活動できているかの確認を行う。指示を聞いてもよく分からなかったところがあり、活動をし始められない児童もいる。そのような児童が気軽に相談できるように、児童一人一人の様子を見て回る。

以上3点を意識して指示を出したことによって、活動に取り掛かるスピードが早くなり、練習問題も個人で解けることが増えた。児童のノートのかえりでは、「はかりかたができるようになった。一人でできるようになった。」と書かれており、児童自身も解けるようになった実感をもてた。

### (3) 発問

第7時では角のかき方を使って三角形をかく活動を行うため、三角形をかくときに意図的に間違ったかき方をした。それは、底辺に対する角度は作図できたものの、残る三角形の二つの辺が交わらず、三角形にならないというものである。

教師が問いかけた際、黒板に板書した図形やこれまでにまとめてきたノートを見て考える児童が多かった。また悩みながら三角形をかいていた児童も、一度手を止めて周りの児童と一緒に考えていた。何度も問いかけたことで、全員が考えるまでの時間を持たせることができた。

この授業のまとめでは、「三角形をかくときには、( )に気を付ける。」の( )の中に当てはまる言葉を、児童毎に考えて自由記述で書いてもらった。すると「角の辺が交わること」や「線(辺)が交わらないときに線(辺)をのばすこと」等、発問した内容に対する解決策について書く児童が17人中5人いた。よって、教師が提示した意図的な間違いが児童全体で考える機会を与え、学習内容をより印象付けたと考えられる。

## 5 成果と課題

まず得られた成果として、「指導言」を工夫する方法を説明、指示、発問に分けて考えたことで、より具体的な授業改善に繋がった。説明では、教師が一方向的に話すのではなく、児童の発言や考えを引き出すような手立てを取ることで、児童の言葉を繋ぐような授業を行うこと。指示では、指示を出すタイミングや目線、出した後の確認など、児童が指示の聞き取りに集中しやすくなる工夫を実践できた。また発問では、児童が間違いやすいところを教師が提示することで、クラス全体を巻き込んで考えることができ、学習内容をより印象づけることができた。どの指導言の工夫も、教科に関係なく活用することができるため、算数に限らず他の教科での児童の反応も検証していきたい。

その一方で、実践した指導言の有効性を客観的に評価することができなかった。教師となった際には、一年を通じて実践するなかで、状況に応じた指導言の効果を把握したい。またそれぞれの指導言に対する課題もあった。まず説明は、工夫を行ってもまだ教師の話す時間が長かったため、説明したい内容に関する簡単な一問一答を児童に出すことで、説明の代わりとすべきだった。また出した指示が曖昧で児童が困惑してしまうことがあった。角度の大きさを予想してから測るように指示したが、予想を書く回答欄を設けていなかったため、予想を書く児童と書かない児童に分かれてしまった。指示を出した後、児童に分からないところがないか児童に尋ねてから、活動を始めるようにしたい。発問では、ゆさぶる場面を見つけれなかったことがあった。必ず一部の児童が悩む場面はある。だからこそ、その悩みをクラス全体で考えられるような、問いかけ方を意識すべきだった。よって今後の授業でも、指導言の工夫を活用する場面を事前に設定することや、実践した指導言を振り返ることで、より効果的な指導言を使えるように精進していきたい。

注

---

<sup>1)</sup>文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』（東洋館出版社,2017）,p.76-77.

<sup>2)</sup>石井英真『授業づくりの深め方―「よい授業」をデザインするための5つのツボ―』（ミネルヴァ書房,2020）,p.183.

<sup>3)</sup>大西忠治『発問上達法』（民衆社,1988）,p.127.

<sup>4)</sup>同書,p.129.

<sup>5)</sup>同書,p.143.